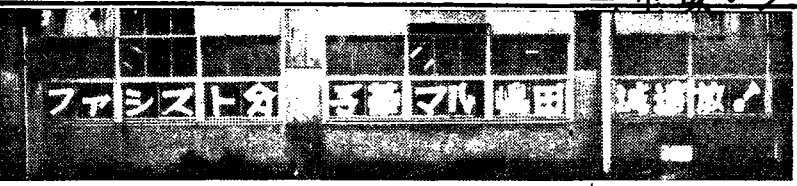


89 狭山再審要求 中央討論会開かる

三里塚・シエット闘争貫徹 / 「国鉄35万人体制」粉碎!



「本部」派への怒りは、動労千葉、国労組合員を問わず職場に充満している。〈津田沼〉

いかなる事態になろうとも不屈に闘いつづける

石川一雄氏メッセージ

八月九日、狭山差別裁判上告棄却四周年糾弾・再審要求中央討論集会在、日本教育会館において開催された。
狭山闘争の全人民的な発展に恐れをなした日帝・権力は、七七年8・9上告棄却以降、八年2・7再審棄却、今年3・25異議審棄却と、狭山闘争解体一部落差別の攻撃をやつぎばやに激化している。さらに、現在、日帝・高裁は、上告棄却の張本人である栗本一夫を抗告審判事に登用するという断じて許すことのできない抗告審棄却策動を強めている。狭山闘争は、極めて重大な局面を迎えている。われわれは、獄中十八年の石川一雄氏と固く連帯し、なんとしても石川氏奪還・狭山闘争の歴史的勝利をかちとらなければならぬ。

三里塚・狭山の結合で二期阻止へ

― 反対同盟 ―

こうした状況のなかで開催された8・9中央討論集会是、解放同盟を先頭とした全国からの結集により、通路やロビーまで埋めつくされる熱気のなかではじまった。
集会是、主催者からのあいさつの後、部落解放同盟より西岡中執、狭山弁護団を代表して中山弁護士、石川氏の無実を証明する鑑定書の鑑定人として生越教授の三氏よりそれぞれの立場からの、狭山闘争の勝利へ向けて報告と提案を受けた。とりわけ、解放同盟西岡中執は、「今こそ狭山闘争の全国化・全人民化が必要」と熱烈に訴え、会場からは圧倒的な拍手がおくられた。その後、活動報告と討論として、会場から十名を越える発言者たちが、解放同盟各県連からは、8・6・8・9を反戦平和と部落解放の日として子供会でゼッケン登校をした闘いなど、いきいきとした闘いの報告がおこなわれた。

同盟の石毛常吉氏がたち、会場全体に「三里塚と狭山の闘いは一体である。三里塚闘争と狭山闘争の結合のなかに勝利はある。切迫する三里塚二期決戦への総決起を」と訴え、ひととき大きな拍手のなかで確認された。
集会の最後に朗読された石川さんの獄中からのメッセージは、「夏期休暇中抗告棄却の暴挙に出ることも考えられるので警鐘を乱打しなければならぬ。私は今後いかなる事態になろうとも不屈に闘いつづける」と、権力の獄死攻撃に対して徹底抗戦で闘いつづける石川さんの不屈の決意を全参加者につたえた。さらに、石川さんの兄、石川宣吉さんの発言は、「石川の両親もすでに高齢です。一日も早く石川を両親の手に」という切々とした訴えは、狭山闘争への決起の決意を新たに固められるものであった。

獄中の石川一雄氏に固く連帯し、八月抗告棄却策動をなんとしても打ち砕き、抗告審判勝利、石川氏奪還まで全力をあげ、さらに闘いを強めなければならぬ。

動労「本部」派の昨今の状況

二名の脱退に動揺する「本部」派

八月五日付での山田(回)、坂間両君の動労脱退は動労「本部」反動分子に限りない動揺と組織的危機を強制している。「6・12傷害暴行事件」をデッチ上げ、タレコミ告訴をもって権力に売り渡すという鉄労以下の反労働者的行為に走った「本部」反動分子は、「これで動労千葉は解体できる」と思いこんだ矢先に津田沼のトラの子二名の動労脱退という現実を直面して右往左往している。
「動労千葉は労組とは無縁な暴力集団」などとヒボウ・中傷し「告訴は当然」などといいきり、「動労千葉弾劾」決議をあげてみたとして、それは動労「本部」反動分子の反階級的行為を正当化することはできないのである。それが今回の二名の動労脱退に示されたのだ。「本部」反動分子の組織的危機はこれで終わったわけではない。
すでに津田沼の検修のOは、「本部」反動分子のファシスト的ひきまわしと告訴路線にいやげがさして「国鉄をやめる」と言い出し長期病欠届を出して休んでしまっている。
いまや「本部」派一掃一動労大改革は新たな段階へと突入した。さらに全組合員は新たな決意を燃やして「本部」派一掃へと決起しよう。

嶋田・斎藤(右)らは、身ぶり手ぶりのデッチ上げ演説で、6名の仲間を権力に売りわたしたのだ!(7月8日、デッチあげ「現場検証」)

